

「西方の人」の運命と美(その三)

高田 瑞穂

視であった。

「バプテズマのヨハネはロマン主義を理解出来ないクリストだった。」

芥川は「ヨハネ」の冒頭に、こういう断定を置く。その故に、「クリストに洗礼を授けたヨハネは櫛の木のやうに遅しかつた」にもかかわらず、「クリストに及ばなかつた」のであつた。そういうヨハネの「最後の慟哭」が芥川の心を打つたのであろう。それは、芥川自身の「最後の慟哭」でもあつたにちがいない。

「彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすのである。——『クリストはお前だつ

(四) 「ヨハネ」と「ヨハネの言葉」

芥川にとって「聖霊」とは「永遠に超えんとするもの」であり、「永遠に超えんとするもの」とは「天才」を宿した「人の子」であるという前提に、今私は立っている。すると、「西方の人」の視点に一つの定着が生じ、その視点に即しての享受が可能となる。それは可能性の問題ではない。芥川自身の視点への近接である。「ヨハネ」(「西方の人」第十一章)と「ヨハネの言葉」(「統西方の人」第十章)とは、既に明らかに地上の天才と天才との微妙な関連の凝

「たか、わたしだつたか？」

芥川がここに、クリストに対するヨハネの敗北感を感じ得ていたことには疑いはあるまい。同時に、その敗北感自体に、ある美的なるものを享受していたことも明らかである。人間にとつて、単なる敗北感は美的感銘につながるはずがないとしたら、芥川を動かしたヨハネの「最後の慟哭」とはそもそも何であつたか。「ヨハネ」においては、芥川はそのことに言及するよりも、そういうヨハネに対するクリストの「冷か」な態度を告げている。「ヨハネ」後半をここに引こう。

『クリストはお前だつたか、わたしだつたか？』

ヨハネの最後の慟哭は——いや、必ずしも慟哭ばかりではない。太い櫛の木は枯れかかつたものの、未だに外見だけは枝を張つてゐる。若しこの気力さへなかつたとしたならば、二十何歳かのクリストは決して冷かにかうは言はなかつたであらう。

『わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い。』

この後半部は、必ずしも明確に一筋の道を告げてはいない。「——いや、必ずしも慟哭ばかりではない。」という挿

入句は、何をどう告げようとしたのであつたらうか。文字をたどれば、それは当然、直後の「外見だけは枝を張つてゐる」に連なるはずである。そういう無理な虚勢が、直接クリストの「冷か」なことばにつながる。そうだとすると、芥川の「最後の慟哭」から受けた感銘もまた、クリストには「冷か」に受け取られなければならない筈である。そうではなく、「若しこの気力さへなかつたとしたならば」という仮定は、芥川にとつて、クリストと共にヨハネに注ぐ忠言であつたのであろうか。そうだとすると、芥川の「最後の慟哭」におけるヨハネへの共感はどういうものであつたか。こういう錯雑を内に止めつつ、一度福音書に帰る必要を私は感じないわけにはゆかない。

「ヨハネは獄中でクリストのみわざについて伝え聞き、自分の弟子たちをつかわして、イエスに言わせた、『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか。イエスは答えて言われた、『行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない

者は、さいわいである。』」（『マタイによる福音書』第十章）

これと殆ど同様のことばが、『ルカによる福音書』第七章にも記されているが、芥川のいう「最後の慟哭」は、これらの記述とややずれているようである。ヨハネの「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか。」は、必ずしも、「クリストはお前だつたか、わたしだつたか?」とは符合しないであろう。だが、必ずしも背反でもない。

「さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は『バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのような力が彼のうちに働いているのだ』と言い、他の人々は『彼はエリヤだ』と言い、他の人々は『昔の預言者のようだ』と言った。ところが、ヘロデはこれを聞いて、『わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ』と言った。』（『マルコによる福音書』第六章）

首を切られて、その首を盆にのせられてヘロデの妻ヘロデアに渡されたヨハネは、ここにも明らかのように、本質的にイエスにつながる存在であった。芥川によれば、従っ

て、ヨハネもまた天才の一人であった。だが、イエスは、そういうヨハネと自分とを区別して次のように言う。

「あなたがたによく言っておく。女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった。しかし、天国で最も小さい者も、彼よりは大きい。」（『マタイによる福音書』第十一章）

イエスのことばは、明らかに、神と人間との峻別であった。しかし芥川は、同じく天才を宿した人の子相互の格差を見続けた。だからこそ、「西方の人」第十一章の、「バプテスマのヨハネはロマン主義を理解出来ないクリストだつた」のである。そして芥川は、しばしば弱きものの共感者であった。ヨハネに寄せる感慨は、「ヨハネの言葉」において一段と美しく告げられる。それは、同時に、クリストの人間化の徹底でもあった。全文を引く。

『「世の罪を負ふ神の仔羊を觀よ。我に後れ来らん者は我より優れる者なり。」——バプテスマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと伝えられてゐる。壁の上にストリンドベリーの肖像を掲げ、『ここにわたしよりも優れたものがある』と言つた、逞しいイブセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであら

う。そこに英に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたかは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆららかに星を撫でてゐるやうに。……」

もう一つ引用を重ねたい。ヨハネの心象が、「イブセンの心もち」であるよりは、芥川自らのそれに、まぎれもなく符合することを告げる一文である。「或阿呆の一生」第四十五「Divan」がそれである。そこで、芥川の前に聳立する存在は、これもまた詩人ゲエテであった。

「Divan はもう一度彼の心に新しい力を与へようとした。それは彼の知らずにゐた『東洋的なゲエテ』だつた。彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心の中にはアクロポリスやゴルゴダの外にアラビアの薔薇さへ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿る多少の力を持つてゐたならば、——彼はディヴァンを読み取り、恐ろしい感動の静まつた後、しみじみ生活的官官に

生まれた彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。」

芥川龍之介自らの「最後の慟哭」であつた。

ここで私は、自然に、「続芭蕉雜記」の第三章を思い浮かべる。昭和二年七月の筆に成るこの一文において、芥川の告げようとしたものも、同じく自らの「最後の慟哭」であつたにちがいない。

「惟然の風狂を喜ぶものは、——就中軽妙を喜ぶものは何とでも勝手に感服して善い。けれども僕の信する所によれば、そこに僕等を動かすものは畢に芭蕉に及ばなかつた、芭蕉に近い或詩人の慟哭である。」

「ヨハネ」及び「ヨハネの言葉」をめぐる芥川の内的風景は、ほぼ右の如く私に映じた。しかし、それが、「ヨハネ」ないし「ヨハネの言葉」の客観的把握であり得たかどうかには、疑いの余地のあることも事実である。例えば、藤井武の「イエス伝研究」序論第一章第一節は「ヨハネに対するイエスの同情」と題されている。その冒頭を引いておく。

「我等はヨハネに同情する。しかし何人の同情かイエスのそれに比し得よう。彼の心に訴へて喚び出したる反

響こそ実に同情の完全なるものである。ヨハネの弟子の言を聞いて、イエスはまず蹟かんとする先驅者を支へんと欲した。之を支へて再び喜ばしき希望をその心に復興せしめんことを欲した。

答へて言ひ給ふ、「往きて、汝等が見聞する所をヨハネに告げよ。盲人は見、跛足は歩み、癩病人は潔められ、死人は甦らせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我に蹟かぬ者は福ひなり。」(マタイ一一の四

一六)

イエスの言語は言語中の言語である。(略)イエスの発言はいつも詩であつた。然り、それは比ひなく美はしき詩であつた。」

その同じイエスの言葉に「冷か」なものを感得したのが芥川だったのである。

もう一つ、必ずしもイエスの心情を「同情の完全なるもの」と考えない、少くともヨハネにはそう受け取られなかつたかも知れないという考え方も示しておこう。ルナンの『イエス伝』(一八六一)第十二章の一節である。

「『おほよそ、我に蹟かぬ者は幸ひなり』。この答へが、バプテスマのヨハネの生存中にとどいたか、この厳格な

禁欲者をどんな気持ちにしたか、分らない。ヨハネは、自分の預言した者が早くも現れたことを確信し、慰めをうけて死んだか、イエスの使命に疑ひを残したか。何事も教へてくれない。しかし、ヨハネ派がキリスト教会に並行して継続してゆくを見ると、ヨハネは、イエスを尊敬してはゐたが、イエスを、神の約束の実現者とは見なかつたやうに考へたはうが、よささうである。」(津田稔訳による)